

$\mu$ T-Kernel3.0

FatFs実装仕様書

時計ドライバ、RAMディスクドライバ実装仕様書

Version. 01. 00. 00

2022. 10. 31

# 目次

1. 概要 .....	4
1.1 目的 .....	4
1.2 実装の基本方針 .....	4
1.3 バージョン情報 .....	4
1.4 関連ドキュメント .....	4
1.5 ソースコード構成 .....	5
1.6 プロジェクト・ファイル .....	5
2. 時計(クロック)ドライバ .....	6
2.1 時計(クロック)ドライバの概要 .....	6
2.2 時計(クロック)ドライバの仕様 .....	6
2.2.1 対象デバイス .....	6
2.2.2 デバイス名 .....	6
2.2.3 固有機能 .....	6
2.2.4 属性データ .....	6
2.2.5 固有データ .....	6
2.2.6 事象通知 .....	6
2.2.7 エラーコード .....	7
2.3 ヘッダファイルとサービス関数 .....	7
2.4 サンプルプログラム .....	7
2.5 スタックサイズ .....	8
3. RAM ディスクドライバ .....	9
3.1 RAM ディスクドライバの概要 .....	9
3.2 RAM ディスクドライバの仕様 .....	9
3.2.1 対象デバイス .....	9
3.2.2 デバイス名 .....	9
3.2.3 固有機能 .....	9
3.2.4 属性データ .....	9
3.2.5 固有データ .....	10
3.2.6 事象通知 .....	10
3.2.7 エラーコード .....	10
3.3 ヘッダファイルとサービス関数 .....	11
3.4 サンプルプログラム .....	11
3.5 スタックサイズ .....	11
4. FatFs .....	12
4.1 FatFs とは .....	12
4.2 FatFs の $\mu$ T-Kernel 3.0 への移植 .....	12

4.2.1 システム関連機能を $\mu$ T-Kernel 対応に変更.....	12
4.2.2 デバイス入出力を $\mu$ T-Kernel 対応に変更.....	13
4.3 FatFs の構成オプション .....	13
4.3.1 機能構成 .....	13
4.3.2 ローカルと名前空間の構成.....	15
4.3.3 ドライブ/ボリューム構成.....	16
4.3.4 システム構成 .....	17
4.4 サンプルプログラム .....	19
5. 問い合わせ先 .....	20

## 1. 概要

### 1.1 目的

本構築手順書はルネサスエレクトロニクス社のRX用に改変した $\mu$ T-Kernel3.0 (V3.00.00)のソースコードにFatFsのFATファイルシステムを実装するための手順を記載した仕様書です。

### 1.2 実装の基本方針

本実装の基本方針を以下に示します。

- FatFsは $\mu$ T-Kernel3.0仕様の $\mu$ T-Kernel/SMのデバイス管理機能に準拠した仕様とする。
- FatFsが使用するget\_fattime関数のタイムスタンプには時計(クロック)ドライバを利用する。時計(クロック)ドライバは、T-Engine標準デバイスドライバの仕様に準拠した形式とする。
- システムディスクとしてはRAMディスクを提供する。RAMディスクドライバも、T-Engine標準デバイスドライバのシステムディスクドライバの仕様に準拠した形式とする。

### 1.3 バージョン情報

本実装に利用したFatFs ([http://elm-chan.org/fsw/ff/00index\\_e.html](http://elm-chan.org/fsw/ff/00index_e.html)) のバージョン情報は以下の通りです。

Ver. : R0.14b

リリース日 : 2021/4/17

### 1.4 関連ドキュメント

以下に本実装仕様書の関連するドキュメントを示します。

分類	名称	発行
OS仕様	$\mu$ T-Kernel3.0仕様書 (Ver. 3.00.00)	TRONフォーラム TEF020-S004-3.00.00
ドライバ仕様	T-Engine標準デバイスドライバ 仕様	TRONフォーラム TEF040-S216-01.00.01
共通実装仕様	uTK3.0共通実装仕様書	
ハードウェア 依存実装仕様	uTK3.0_AP-RX63N-0A実装仕様書	
	uTK3.0_AP-RX65N-0A実装仕様書	
	uTK3.0_AP-RX72N-0A実装仕様書	
構築手順	uTK3.0_AP-RX63N-0A構築手順書	
	uTK3.0_AP-RX65N-0A構築手順書	
	uTK3.0_AP-RX72N-0A構築手順書	

## 1.5 ソースコード構成

本実装のソースコードのディレクトリ構成を以下に示します。

└ device	デバイスドライバ・ミドルウェア
└ rtc	時計(クロック)ドライバ
└ └ sysdepend	実装依存定義
└ rd	RAMディスクドライバ
└ └ sysdepend	実装依存定義
└ include	アプリケーション用のインクルードファイル
└ lib	ライブラリ
└ └ libfat	FatFsファイルシステム

機種依存定義 sysdepend ディレクトリは以下のように構成されます。

└ sysdepend	実装依存定義
└ └ <ターゲット1>	ターゲット1 依存部
└ └ :	
└ └ <ターゲットn>	ターゲットn 依存部

## 1.6 プロジェクト・ファイル

本実装を利用するためのプロジェクト・ファイルは「mtkernel\_3/ide/cs」のフォルダにあります。

アイコンの名称が \*\*\*\*\_FAT.mtpj となっているものがファイルシステムを利用可能な  $\mu$ T-Kernel3.0 のプロジェクト・ファイルです。ダブルクリックすればCS+が起動されます。

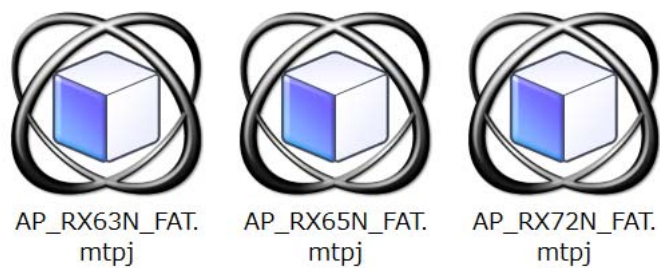


図1.1 FatFs対応のプロジェクト・ファイル

## 2. 時計(クロック)ドライバ

### 2.1 時計(クロック)ドライバの概要

時計(クロック)ドライバではハードウェア・タイマとしてRX内蔵のRTC(リアルタイムクロック)を利用します。インタフェース仕様はT-Engine標準デバイスドライバ仕様に準拠しています。また、時計(クロック)ドライバを $\mu$ T-Kernelに登録するためのrtcDrvEntry関数をサービス関数として提供します。ユーザシステムではrtcDrvEntry関数を呼び出すことにより、以降の処理で時計(クロック)ドライバを $\mu$ T-Kernel/SMのデバイス管理機能を使って利用可能となります。

### 2.2 時計(クロック)ドライバの仕様

#### 2.2.1 対象デバイス

リアルタイムクロックにより時刻を管理するデバイスです。

#### 2.2.2 デバイス名

デバイス名は“CLOCK”です。

<dev\_rtc.h>をインクルードすることでRTC\_DEVNMマクロ名で参照できます。

#### 2.2.3 固有機能

リアルタイムクロックの時刻設定/取得が可能です。

ただし、ハードウェア固有の機能はサポートしていません。

#### 2.2.4 属性データ

以下の属性データのみをサポートします。

DN\_CKDATETIME : 現在時刻の設定/取得 (RW : 読み込み/書き込み可)

```
data : DATE_TIM
typedef struct {
    W d_year;    /* 1900年からのオフセット(85～) */
    W d_month;   /* 月 (1 ~ 12, 0) */
    W d_day;     /* 日 (1 ~ 31) */
    W d_hour;    /* 時 (0 ~ 23) */
    W d_min;     /* 分 (0 ~ 59) */
    W d_sec;     /* 秒 (0 ~ 59) */
    W d_week;    /* 週 (1 ~ 54) ※使用しない */
    W d_wday;    /* 曜日 (0 ~ 6, 0 が日曜) */
    W d_days;    /* 日 (1 ~ 366) ※使用しない */
} DATE_TIM;
```

現在時刻(ローカル時間)をリアルタイムクロックへ設定または取得します。

d\_wdayは、設定する時に誤った曜日を設定してもチェックされません。したがって、取得した曜日も必ずしも正しいことは保証されません。d\_week、d\_daysは使用しません。これらの値は不定とります。

#### 2.2.5 固有データ

なし

#### 2.2.6 事象通知

未サポート

## 2.2.7 エラーコード

μT-Kernel3.0仕様書のデバイス管理機能の項を参照ください。時計(クロック)ドライバ固有の特殊なエラーコードは存在しません。

## 2.3 ヘッダファイルとサービス関数

ヘッダファイルはdev\_rtc.hです。

時計(クロック)ドライバを登録するためのサービス関数の仕様は以下の通りです。

ER ercd = rtcDrvEntry(void);

## 2.4 サンプルプログラム

時計(クロック)ドライバをrtcDrvEntry関数で登録、tk\_opn\_devシステムコールでオープン後、現在時刻をターミナルより入力し、tk\_swri\_devシステムコールで設定を行います。その後は1msの間隔で現在時刻をtk\_srea\_devシステムコールで取得し、ターミナルに出力します。

```
#include <stdio.h>
#include <tk/tkernel.h>
#include <tm/tmonitor.h>
#include <dev_rtc.h>

LOCAL DATE_TIM dt;
LOCAL VB buf[32];

EXPORT INT usermain( void )
{
    ID dd;
    SZ asize;

    if( rtcDrvEntry( ) < E_OK )                // RTCドライバを登録
        goto ERROR;
    if( ( dd = tk_opn_dev( RTC_DEVM, TD_UPDATE ) ) < E_OK ) // RTCドライバをオープン
        goto ERROR;

    tm_putstring( "Input now date and time.¥n"
                  "Year:Month:Day:Week:Hour:Minute:Second¥n"
                  "Week is 0 -> Sunday ... 6 -> Saturday¥n"
                  "Ex. 2000:1:1:6:12:34:56¥n¥n" ); // 現在時刻を入力
    tm_getline( buf );
    sscanf( buf, "%ld:%ld:%ld:%ld:%ld:%ld:%ld", &dt.d_year, &dt.d_month, &dt.d_day, &dt.d_wday, &dt.d_hour,
                                                    &dt.d_min, &dt.d_sec );

    tm_putstring( "¥n" );
    dt.d_year -= 1900; // 現在時刻をRTCドライバに書き込み
    if( tk_swri_dev( dd, DN_CKDATETIME, &dt, sizeof(dt), &asize ) < E_OK || asize != sizeof(dt) )
        goto ERROR;
    while( 1 ) {
        tk_dly_tsk( 1 );
        if( tk_srea_dev( dd, DN_CKDATETIME, &dt, sizeof(dt), &asize ) < E_OK || asize != sizeof(dt) )
            goto ERROR; // 現在時刻をRTCドライバから読み込み
        dt.d_year += 1900;
        tm_printf( "¥r¥ld:¥.2ld:¥.2ld:¥ld:¥.2ld:¥.2ld:¥.2ld", dt.d_year, dt.d_month, dt.d_day, dt.d_wday,
                                                            dt.d_hour, dt.d_min, dt.d_sec );
    }
ERROR:
    return 0;
}
```

時計(クロック)ドライバのサンプルプログラム (usermain\_rtc.c)

サンプルプログラムの実行結果は以下の通りです。

```
Input now date and time.  
Year:Month:Day:Week:Hour:Minute:Second  
Week is 0 -> Sunday ... 6 -> Saturday  
Ex. 2000:1:1:6:12:34:56  
  
2022:11:7:1:14:13:30  
2022:11:07:1:14:13:40 ← この現在時刻が1秒毎に変化します
```

## 2.5 スタックサイズ

時計(クロック)ドライバの処理関数の中で各構築仕様書の5.3.7項に記載された加算条件を超えるものは存在しません。結果、rtcDrvEntry関数を含め、Call Walkerに表示された値はそのまま各スタックサイズの計算式に利用可能です



### 3. RAM ディスクドライバ

#### 3.1 RAM ディスクドライバの概要

RAMディスクドライバはターゲットボード搭載の外部接続RAM（SRAMまたはSDRAM）をディスクとして操作するためのドライバです。インタフェース仕様はT-Engine標準デバイスドライバ仕様に準拠しています。また、RAMディスクドライバを $\mu$ T-Kernelに登録するためのrdDrvEntry関数をサービス関数として提供します。ユーザシステムではrdDrvEntry関数を呼び出すことにより、以降の処理でRAMディスクドライバを $\mu$ T-Kernel/SMのデバイス管理機能を使って利用可能となります。

#### 3.2 RAM ディスクドライバの仕様

##### 3.2.1 対象デバイス

RAMディスクを管理するデバイスです。

##### 3.2.2 デバイス名

デバイス名は“rda”です。

<dev\_disk.h>をインクルードすることでRAM\_DISK\_DEVMマクロ名で参照できます。

##### 3.2.3 固有機能

区画のサポート

物理フォーマットのサポート

※論理フォーマットはアプリケーション（formatコマンド等）で行います。

##### 3.2.4 属性データ

以下の属性データをサポートします。

R：読み込みのみ可

W：書き込みのみ可

```
/* ディスク属性データ番号 */
typedef enum {
    DN_DISKINFO      = TDN_DISKINFO, /* ディスク情報 */
    DN_DISKFORMAT     = -100,         /* ディスクフォーマット */
    DN_DISKMEMADR     = -103,         /* メモリディスク領域先頭アドレス */
    DN_DISKCHSINFO    = -105,         /* ディスクCHS情報 */
} DiskDataNo;
```

DN\_DISKINFO：ディスク情報 (R)  
data: DiskInfo

```
typedef struct {
    DiskFormat format; /* フォーマット形式 */
    BOOL protect:1;    /* プロテクト状態 */
    BOOL removable:1;  /* 取り外し可否 */
    UW rsv:30;         /* 予約 (0) */
    W blocksize;       /* ブロックバイト数 */
    W blockcont;       /* 総ブロック数 */
} DiskInfo;
```

format:      フォーマット形式

protect : ハード的に書き込みが禁止されている状態  
removable : 取り外し可否  
blocksize : 物理ブロックサイズ(バイト数)  
blockcont : 総ブロック数

ディスク情報を取り出します。

DN\_DISKFORMAT : ディスクフォーマット (W)  
data : DiskFormat

```
typedef enum
    DiskFmt_MEM = -1,          /* メモリディスク */
} DiskFormat;
```

正しいフォーマット種別を書き込むことにより物理フォーマットを開始します。  
RAMディスクなので全ブロックを一定の値(0xFF)で埋め、ディスク上の情報を完全に消します。

DN\_DISKMEMADR : ディスク領域先頭アドレス (R)  
data : void \*

ディスクとして使用するメモリの先頭アドレス(論理アドレス)を取り出します。  
このアドレスから、DiskInfoで得られるディスク容量(blocksize \* blockcontバイト)分の連続した物理メモリ空間がディスクとして使用されるメモリです。  
任意にアクセスできるのはtk\_opn\_devシステムコールによってデバイスをオープンしている時のみです。tk\_cls\_devシステムコールによってデバイスをクローズした後はアクセスしてはいけません。また、一旦クローズし、再度オープンした場合には、ディスク領域の先頭アドレスも再度取り出し、そのアドレスを使用してアクセスしなければなりません。

DN\_DISKCHSINFO : ディスクCHS情報 (R)  
data : DiskCHSInfo

```
typedef struct {
    W cylinder;          /* 総シリンダ数          */
    W head;              /* シリンダ当たりのヘッド数 */
    W sector;            /* ヘッド当たりのセクタ数  */
} DiskCHSInfo;
```

ディスクのシリンダ(C)、ヘッド(H)、セクタ(S) 情報を取り出します。  
RAMディスクなので、C = 1, H = 1, S = 総ブロック数となります。

### 3.2.5 固有データ

以下の固有データをサポートします。

データ番号 ( 0 ~ ) : ディスクのブロック番号

データ数 : 読み込み/書き込みのブロック数

### 3.2.6 事象通知

未サポート

### 3.2.7 エラーコード

μT-Kernel3.0仕様書のデバイス管理機能の項を参照ください。RAMディスクドライバ固有の特殊なエラーコードは存在しません。

### 3.3 ヘッダファイルとサービス関数

ヘッダファイルは dev\_disk.h です。

RAM ディスクドライバを登録するためのサービス関数の仕様は以下の通りです。

```
ER ercd = rdDrvEntry(void);
```

### 3.4 サンプルプログラム

RAMディスクドライバはFatFsから利用されるデバイスドライバであるため、ユーザシステムより直接呼出しを行うのはRAMディスクドライバをシステムに登録するためのrdDrvEntry関数のみです。

また、 $\mu$ T-Kernel3.0仕様において、デバイスドライバは複数のタスクからの利用を考慮して再入可能であることが要求されます。しかしながら、**RAMディスクドライバの処理関数では再入可能とするための排他制御は行いません。理由は、FatFsにも排他制御を行うための機能があるため、RAMディスクドライバを複数のタスクで使用する場合はFatFsが持つ排他制御機能を利用してください。**

### 3.5 スタックサイズ

RAMディスクドライバの処理関数の中で各構築仕様書の5.3.7項に記載された加算条件を超えるものは存在しません。結果、rdDrvEntry関数を含め、Call Walkerに表示された値はそのまま各スタックサイズの計算式に利用可能です

## 4. FatFs

### 4.1 FatFs とは

FatFsは、小規模な組み込みシステム向けの汎用FATファイルシステムモジュールです。

本実装におけるFatFsライブラリは、オープンソースとして公開されているFatFsのソースコードを $\mu$ T-Kernel3.0用に移植したものです。移植のベースとなったFatFsのバージョンR0.14bのソースコードは以下のURLからダウンロードできます。

[http://elm-chan.org/fsw/ff/00index\\_e.html](http://elm-chan.org/fsw/ff/00index_e.html)

FatFsでは、システムディスクドライバ（本実装ではRAMディスクドライバ）と時計（クロック）ドライバを利用します。これらはT-Engine標準デバイスドライバ仕様に準拠したデバイスドライバです。このため、FatFsも、T-Engine標準デバイスドライバ仕様のシステムディスクドライバで動作するように変更してあります。

### 4.2 FatFs の $\mu$ T-Kernel3.0 への移植

$\mu$ T-Kernel3.0用に移植したFatFsのソースコードは以下のディレクトリに含まれています。

mtkernel\_3¥lib¥libfat

上記のディレクトリには、さらに2つのディレクトリが含まれており、各ディレクトリにはそれぞれ以下のソースコード、またはドキュメントが含まれています。

- documents

FatFsの付属ドキュメントが含まれています。

- source

FatFs本体のソースコードが含まれています。

FatFsを $\mu$ T-Kernel3.0用に移植するために、以下の項目について修正しています。

- システム機能関連の定義を $\mu$ T-Kernelの機能を利用して実装
- デバイス入出力を $\mu$ T-Kernel/SMのデバイス管理機能に準拠した形式で実装

その他の箇所は改変していません。

#### 4.2.1 システム関連機能を $\mu$ T-Kernel 対応に変更

FatFsをリエントラント対応で動作させる場合は、FF\_SYNC\_tというオブジェクトを定義して排他制御を行う設計になっています。FF\_SYNC\_tはOSによって提供される排他制御機能を利用して実装します。

本実装では、 $\mu$ T-Kernelのセマフォまたはミューティクス（コンフィグレーションで選択可能）を利用しています。具体的に、以下のファイルを $\mu$ T-Kernelのセマフォまたはミューティクスを利用する方式に変更しています。

mtkernel\_3¥lib¥libfat¥source¥ffconf.h

mtkernel\_3¥lib¥libfat¥source¥ffsystem.c

#### 4.2.2 デバイス入出力を $\mu$ T-Kernel 対応に変更

$\mu$ T-Kernelでは、デバイスドライバのインタフェースをT-Engine標準デバイスドライバ仕様として規定しています。本実装のFatFsでは、ディスク操作のための関数に上記のドライバ仕様を適用しています（ただし、ドライバ側での排他制御は実施していません）。具体的には、以下のファイルをシステムディスクドライバに準拠した方式に変更しています。

```
mtkernel_3¥lib¥libfat¥source¥diskio.c
```

また、FatFsではget\_fattime関数でタイムスタンプの時刻を取得しますが、その時刻管理もT-Engine標準デバイスドライバ仕様に準拠した時計（クロック）ドライバを利用する方式に変更しています。具体的には、以下のファイルに含まれるget\_fattime関数を時計（クロック）ドライバに準拠した方式に変更しています。

```
mtkernel_3¥lib¥libfat¥source¥fatlower.c
```

#### 4.2.3 FatFsの機能制限

$\mu$ T-Kernel3.0用に移植したFatFsは、公開されているFatFs R0.14bをそのまま利用しています。オリジナルのFatFsに実装されていない機能を追加したり、オリジナルのFatFsに実装されていた機能を削除したりするといった改造は行っていません。

FatFsの機能の詳細に関しては、FatFsの付属ドキュメント、またはソースコードを確認してください。

```
mtkernel_3¥lib¥libfat¥documents¥00index_e.html
```

### 4.3 FatFs の構成オプション

FatFsライブラリでは、サポートする機能の有効／無効を選択することができます。

以下のファイルで定義している各マクロの設定値を変更してから、ビルドを行ってください。

```
mtkernel_3¥lib¥libfat¥source¥ffconf.h
```

#### 4.3.1 機能構成

##### ● FF\_FS\_READONLY

0：リード/ライト（デフォルト値）

1：リードオンリー

リードオンリー構成では、書き込みAPI関数、f\_write、f\_sync、f\_unlink、f\_mkdir、f\_chmod、f\_rename、f\_truncate、f\_getfreeとオプションの書き込み関数が削除されます。

##### ● FF\_FS\_MINIMIZE

基本API関数を段階的に削除します。

値	説明
0	全ての基本API関数が利用可能。（デフォルト値）
1	f_stat、f_getfree、f_unlink、f_mkdir、f_chmod、f_utime、f_truncate、f_rename関数が削除されます。
2	1に加え、f_opendir、f_readdir、f_closedir関数が削除されます。

3	2に加え、f_lseek関数が削除されます。
---	------------------------

● FF\_USE\_FIND

フィルタ付きディレクトリ読み出し機能の構成（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。有効にすると、f\_findfirst、f\_findnext関数が利用可能になります。FF\_FS\_MINIMIZEは、1以下でなければなりません。

● FF\_USE\_MKFS

ボリューム作成機能の構成（0：無効 または 1：有効（デフォルト値））。有効にするとf\_mkfs関数が利用可能になります。

● FF\_USE\_FASTSEEK

高速シーク機能の構成（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。

● FF\_USE\_EXPAND

連続領域割り当て機能の構成（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。有効にするとf\_expand関数が利用可能になります。

● FF\_USE\_CHMOD

メタデータ操作機能の構成（0：無効（デフォルト値）または 1:有効）。有効にすると、f\_chmod、f\_utime関数が利用可能になります。FF\_FS\_READONLY = 0 でなければなりません。

● FF\_USE\_LABEL

ボリュームラベル操作機能の構成（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。有効にすると、f\_getlabel、f\_setlabel関数が利用可能になります。

● FF\_USE\_FORWARD

ストリーミング読み出し機能（f\_forward関数）の構成（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。

● FF\_USE\_STRFUNC

文字列入出力API関数f\_gets、f\_putc、f\_puts、f\_printfの構成。

値	説明
0	文字列入出力API関数を使用しない。（デフォルト値）
1	文字列入出力API関数を使用する。データのLF-CRLF変換はしない。
2	文字列入出力API関数を使用する。データのLF-CRLF変換をする。

● FF\_PRINT\_LLI

f\_printfでのlong long型のサポート（0：未サポート（デフォルト値）または 1：サポート）。

● FF\_PRINT\_FLOAT

f\_printfでの浮動小数点型のサポート（0：未サポート（デフォルト値）または 1：サポート）。

#### ● FF\_STRF\_ENCODE

LFNが有効で FF\_LFN\_UNICODE  $\geq$  1 の場合、文字列関数は文字エンコーディングを変換します。

FF\_STRF\_ENCODEは、f\_gets、f\_putc、f\_puts、f\_printfの関数を介して読み書きされるファイルのエンコーディングを指定します。

値	説明
0	ANSI/OEM
1	UTF-16LE
2	UTF-16BE
3	UTF-8

### 4.3.2 ロケールと名前空間の構成

#### ● FF\_CODE\_PAGE

パス名等の文字列データのコード ページを指定します。不適切な設定はファイル オープン エラーの原因になる可能性があります。

値	説明
932	日本語（DBCS）（デフォルト値）
その他	マニュアルを参照ください。

#### ● FF\_USE\_LFN

長いファイル名（LFN）のサポートを指定します。LFN操作の作業バッファとして（FF\_MAX\_LFN + 1） \* 2バイト（exFAT構成時はさらに（FF\_MAX\_LFN + 44） / 15 \* 32バイト）を使用します。このため、作業バッファにスタックを使用する場合、スタックオーバーフローに注意してください。

値	説明
0	LFN機能を使わない。8.3形式の名前のみ使用可能。（デフォルト値）
1	LFN機能を使う。作業バッファは静的に確保。常にスレッド セーフではない。
2	LFN機能を使う。作業バッファはスタックに確保。
3	LFN機能を使う。作業バッファはヒープに確保。

#### ● FF\_MAX\_LFN

LFN作業バッファのサイズを文字単位で指定（12～255）します。LFN機能が無効のときは意味を持ちません。

#### ● FF\_LFN\_UNICODE

LFN機能が有効な場合にAPIの文字エンコーディングを指定します。

値	説明	TCHAR型
0	ANSI/OEM	char
1	UTF-16	WCHAR
2	UTF-8	char

3	UTF-32	DWORD
---	--------	-------

また、文字列I/O関数の動作もこのオプションの影響を受けます。LFN機能が有効でない場合、このオプションは意味を持ちません。

#### ● FF\_FS\_RPATH

相対パス機能を指定します。

値	説明
0	相対パス機能を使わない。パス名は常にルート ディレクトリから辿る（デフォルト値）。
1	相対パス機能を使う。f_chdir、f_chdrive関数が利用可能になる。
2	1に加え、f_getcwd関数が利用可能になる。

### 4.3.3 ドライブ/ボリューム構成

#### ● FF\_VOLUMES

利用するボリューム（論理ドライブ）の数を1～9の範囲で設定します。

#### ● FF\_STR\_VOLUME\_ID

#### ● FF\_VOLUME\_STRS

FF\_STR\_VOLUME\_IDは、任意の文字列でのボリュームIDのサポートを指定します。

FF\_STR\_VOLUME\_IDが 1 または 2 に設定されている場合、パス名のドライブ番号として任意の文字列を使用できます。FF\_VOLUME\_STRSは、各論理ドライブのボリュームID文字列を定義します。アイテムの数はFF\_VOLUMESより少なくしてはなりません。ボリュームIDストリングの有効な文字は、A から Z、a から z、および 0 から 9 ですが、大文字と小文字を区別せずに比較されます。

FF\_STR\_VOLUME\_ID >= 1 で、FF\_VOLUME\_STRSが定義されていない場合、ユーザー定義のボリューム文字列テーブルを次のように定義する必要があります。

```
const char* VolumeStr[FF_VOLUMES] = {"ram", "flash", "sd", "usb", ...
```

#### ● FF\_MULTI\_PARTITION

物理ドライブ上の複数ボリュームのサポートを指定します。

無効：0（デフォルト値）では、各論理ドライブ番号は同じ物理ドライブ番号にバインドされ、物理ドライブで見つかったFATボリュームのみがマウントされます。

有効：1 の場合、各論理ドライブ番号は、VolToPart[ ]にリストされている任意の物理ドライブおよびパーティションにバインドできます。f\_fdisk関数も利用可能になります。

#### ● FF\_MIN\_SS

#### ● FF\_MAX\_SS

サポートされるセクタ サイズの範囲を構成します（512、1024、2048、または 4096）。殆どのシステム、汎用メモリ カード、およびハードディスクでは、常に両方の512を設定しますが、オンボードフラッシュメモリおよび一部のタイプの光学メディアでは、より大きな値が必要になる場合があります。



す。FF\_MAX\_SSがFF\_MIN\_SSより大きい場合、FatFsは可変セクタ サイズ モード用に構成されます。

- FF\_LBA64

64ビットLBAのサポートを指定します（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。

64ビットLBAを有効にするには、exFATも有効にする必要があります（FF\_FS\_EXFAT = 1）。

- FF\_MIN\_GPT

f\_mkfsおよびf\_fdisk関数でパーティショニング形式としてGPTを切り替える最小セクタ数。最大0x100000000です。FF\_LBA64 = 0の場合、このオプションは意味を持ちません。

- FF\_USE\_TRIM

ATA-TRIMのサポートを指定します（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。Trim機能を有効にする場合、disk\_ioctl関数にCTRL\_TRIMコマンドを実装する必要があります。

#### 4.3.4 システム構成

- FF\_FS\_TINY

Tinyバッファ構成を指定します（0：Normal（デフォルト値）または 1：Tiny）。Tiny構成では、ファイルオブジェクト（FIL）のサイズがFF\_MAX\_SSバイトに縮小されます。ファイル オブジェクトから削除されたプライベート セクタ バッファの代わりにファイル システム オブジェクト（FATFS）内の共通セクタ バッファがファイル データ転送に使用されます。

- FF\_FS\_EXFAT

exFATファイルシステムのサポートを指定します（0：無効（デフォルト値）または 1：有効） exFATを有効にするにはLFNも有効にする必要があります（FF\_USE\_LFN >= 1）。exFATを有効にするとANSI C(C89)の互換性が破棄されることに注意してください。

- FF\_FS\_NORTC

- FF\_NORTC\_MON

- FF\_NORTC\_MDAY

- FF\_NORTC\_YEAR

FF\_FS\_NORTCはタイムスタンプ機能を指定します。システムにRTC機能がない場合、または有効なタイムスタンプが必要ない場合は、FF\_FS\_NORTC = 1 を設定してタイムスタンプ機能を無効にします。この場合、FatFsによって変更されたすべてのオブジェクトには、ローカル時間でFF\_NORTC\_MON、FF\_NORTC\_MDAY、FF\_NORTC\_YEARによって定義された固定タイムスタンプ使用されます。

タイムスタンプ機能を有効にする（FF\_FS\_NORTC = 0（デフォルト値））と、get\_fattime関数で取得した現在の時刻がタイムスタンプとして使用されます。この場合、FF\_NORTC\_MON、FF\_NORTC\_MDAY、FF\_NORTC\_YEARには意味がありません。

これらのオプションは読み取り専用構成（FF\_FS\_READONLY = 1）では意味がありません。

### ● FF\_FS\_NOFSINFO

FAT32ボリュームの正確な空き容量を取得する必要がある場合、設定値のビット0をセットするとボリューム マウント後の最初の時点でf\_getfree関数が全FATスキャンを行って空き容量を得ます。ビット1 は最後割り当てクラスタ番号の使用を制御します。

値	説明
ビット0 = 0	FSINFOの空きクラスタ情報が有効なときはそれを利用する。
ビット0 = 1	FSINFOの空きクラスタ情報を利用しない。
ビット1 = 0	FSINFOの最終割り当てクラスタ番号が有効なときはそれを利用する。
ビット1 = 1	FSINFOの最終割り当てクラスタ番号を利用しない。

### ● FF\_FS\_LOCK

ファイル ロック機能を設定し、重複したファイル オープンおよびオブジェクト オープンに対する不正な操作を制御します。FF\_FS\_READONLY = 1 の場合、この設定は 0 でなければなりません。

値	説明
0	ファイルロック機能を無効にします。ボリュームの破損を避けるためには、アプリケーションプログラムは不正なオープンを避け、開いているオブジェクトを削除して名前を変更する必要があります（デフォルト値）。
>0	ファイルロック機能を有効にします。この設定値は、ファイル ロック制御下で同時に開くことができるファイル/サブディレクトリの数を意味します。ファイル ロック制御は再入可能性とは無関係であることに注意してください。

### ● FF\_FS\_REENTRANT

### ● FF\_FS\_TIMEOUT

### ● FF\_SYNC\_t

FatFsモジュール自体のリエントランシ（スレッド セーフ）の設定をします（0：無効（デフォルト値）または 1：有効）。異なるボリュームに対するファイル アクセスは、この設定に関係なく常にリエントラントです。f\_mount、f\_mkfs、f\_fdiskなどのボリューム操作関数は、この設定に関係なく常にリエントラントではありません。同じボリュームに対するファイル アクセス（つまり、ファイル システム オブジェクトの排他使用）のみが、この設定の制御下にあります。

値	説明
0	非リエントラントです（デフォルト値）。FF_FS_TIMEOUTとFF_SYNC_tは意味を持ちません。
1	リエントラントです。セマフォの機能で排他制御を行います。
2	リエントラントです。ミューティクスの機能で排他制御を行います。

FF\_FS\_TIMEOUTには、μT-Kernelのタイムティック単位でタイムアウト時間を指定します。永久待ちを利用する場合はTMO\_FEVRが利用可能です。

FF\_SYNC\_tは変更しないでください。

#### 4.4 サンプルプログラム

ファイルシステムを利用するための簡易なSHELLをサンプルプログラム（usermain\_fatfs.c）として提供します。サンプルプログラムが持っているファイルシステムを操作するコマンドは以下の通りです。簡易なSHELLであるため、エラー処理は行っていません。

- dir

現在のディレクトリにあるファイルとサブディレクトリの一覧を表示。

- mkdir ディレクトリ名

現在のディレクトリにサブディレクトリを作成。

- rmdir ディレクトリ名

現在のディレクトリにあるサブディレクトリを削除。

- cd ディレクトリ名

サブディレクトリへの移動。cd .. なら、親ディレクトリに移動。

- wt ファイル名 サイズ

現在のディレクトリにファイルを作成。サイズはファイルに書き込む文字数（バイト数）。

- rd ファイル名

現在のディレクトリにある指定されたファイルの内容を表示。

- rm ファイル名

現在のディレクトリにある指定されたファイルを削除。

サンプルプログラムの実行結果は以下の通りです。

```
Input now date and time.
Year:Month:Day:Week:Hour:Minute:Second
Week is 0 -> Sunday ... 6 -> Saturday
Ex. 2000:1:1:6:12:34:56

2022:11:7:1:14:13:30

0:>dir
0:>wt aaa.txt 20
0:>dir
AAA.TXT                20 2022:11:07 14:13:46
0:>rd aaa.txt
!"#$%&'()*+,-./0123
0:>mkdir bbb
0:>dir
AAA.TXT                20 2022:11:07 14:13:46
BBB      DIR           0 2022:11:07 14:14:06
0:>cd bbb
0:bbb>dir
0:bbb>wt aaa.txt 30
0:bbb>dir
AAA.TXT                30 2022:11:07 14:14:26
0:bbb>rd aaa.txt
!"#$%&'()*+,-./0123456789:;<=
0:bbb>rm aaa.txt
0:bbb>dir
```

```
O:\bbb>cd ..
O:>dir
AAA.TXT      20 2022:11:07 14:13:46
BBB          0 2022:11:07 14:14:06
O:>rmdir bbb
O:>dir
AAA.TXT      20 2022:11:07 14:13:46
O:>
```

## 5. 問い合わせ先

本実装に関する問い合わせや他のRXファミリへのポーティングに関する相談は以下のメールアドレス宛にお願い致します。

yuji\_katori@yahoo.co.jp

トロンフォーラム学術・教育WGメンバ  
鹿取 祐二（かとり ゆうじ）

なお、上記のメールアドレスは余儀なく変更される場合がありますが、その際はご了承ください。

以上